

吾輩は猫である

夏目 漱石*

I am a cat

1 そもそも予稿集に何を書くべきか

予稿集の執筆にあたっては、読者として想定される 2 通りの人々、すなわち発表会会場に来ている人とそうでない人の両方に対する配慮が必要である。前者に対しては、学会などでは通常いくつかの部屋を使って同時進行でいくつもの発表が行われるということを踏まえた配慮をしなければならない。この読者にとって予稿集は「その発表を聞きに行くべきか」という判断材料として使われる。後者に対する配慮としては、来られない人が予稿集を読むことで、その研究の概要と得られた知見を一通り知ることができるようにしておくことが必要である。いずれの場合においても、問題意識・アプローチ方法・得られた結果や知見(考察)が簡潔にまとまっていることが必要である。また、明文化はされていないが、慣習として与えられたページのほぼ末尾まで埋めることがマナーである。

2 スタイルファイルの使い方

ここでは電子情報工学科予稿集スタイルファイルの使い方について述べる。

2.1 一般的な注意事項

会議の議事録などとは違い、予稿集をはじめとする論文集の体裁には伝統的かつ「堅い」約束事が数多くある。そのためスタイルファイルも「堅い」ものとなっており、 \LaTeX の特徴の一つであるカスタマイズ機能は大幅に制限される。例えば $\text{\texttt{\textbackslash textheight}}$ などのいわゆるスタイルパラメータを変更するのは当然やめていただきたい。どのようなカスタマイズが許されるのかを示すのは難しいが、一つの基準として「スタイルファイルを読んでみて大丈夫だと確信が持てる」こと以外はしないことを強く勧める。なお、これらの変更やこのガイドで述べている「やめて欲しいこと」を行なっても、**エラーになったりせず単に結果が変になる**ことに注意していただきたい。

2.2 論文の構成

ファイルは次の形式で作る。

```
\documentstyle[a4j, 10pt, twocolumn,
twoside]{jsarticle}
\usepackage{new}
年度と発表月、ページ番号を設定する。
```

```
\newcommand{\Nendo}{2016}
\newcommand{\Happyo}{2}
\newcommand{\LabSymbol}{B}
\setcounter{page}{5}
必要ならばユーザのマクロ定義などをここに書く。
\JTitle{日本語表題}
\JTitleShort{日本語表題 (短縮)}
\Etitle{英語表題}
\Author{学生氏名}
\Teacher{教員氏名}
\begin{document}
\twocolumn[\Maketitle]
\section{(第 1 節の表題)}
.....
< 本文 >
.....
\begin{thebibliography}{9}
.....
\end{thebibliography}
\end{document}
```

2.3 オプション・スタイル

オプションのスタイルファイルによっては予稿集スタイルと矛盾するようなものもあるので、スタイルファイルの性格を良く理解して使用していただきたい。

2.4 巻数、号数などの記述

今年度の西暦年を $\text{\textbackslash Nendo}$ に、卒研発表会の行われる月を $\text{\textbackslash Happyo}$ に、それぞれ設定する。ページ左上の Vol.等は自動計算される。

```
\newcommand{\Nendo}{2019}
\newcommand{\Happyo}{1}
```

また、ページのブロック番号が卒研室ごとに A, B, ... と事前打ち合わせで割り振られているのでこれを $\text{\textbackslash LabSymbol}$ に設定する。卒研室内での発表順に従って 1 から割り振ったページ番号を $\text{\setcounter{page}{5}}$ の 5 という部分に設定する。

```
\newcommand{\LabSymbol}{B}
\setcounter{page}{5}
```

2.5 表題などの記述

表題、英文表題、著者名とその所属を前述のコマンドや環境により定義した後、 $\text{\textbackslash Maketitle}$ によって出力する。

表題 \Jtitle および \Etitle で定義した表題はセンタリングされる。なお和文表題は奇数ページのヘッ

* 指導教員: 正岡 子規

ダにも表示されるので、ヘッダに納まらないような長い表題の場合のみ

`\JtitleShort{ヘッダ用表題}`

のようにヘッダ用に短くしたものを指定する。

著者名と指導教員 著者名と指導教員をそれぞれ

`\Author{著者名}`

`\Teacher{指導教員名}`

なお、著者名・指導教員名とも必ず姓と名を半角の空白で区切る。

2.6 見出し

節や小節の見出しには `\section`、`\subsection` といったコマンドを使用する。簡潔でわかりやすい見出しとなるよう心がける。

2.7 文章の記述

行送り 予稿集は2段組を採用しており、左右の段で行の基準線の位置が一致することを原則としている。また、節見出しなど、行の間隔を他よりたくさんとった方が読みやすい場所では、この原則を守るようにスタイルファイルが自動的にスペースを挿入する。したがって本文中では `\vspace` や `\vskip` を用いたスペースの調整を行なわないでいただきたい。

フォントサイズ このガイドの印刷結果からもわかるように、予稿集スタイルでは様々な大きさのフォントが使われるが、これらはすべてスタイルファイルが自動的にかつ注意深く選択したものである。したがって、著者が自分でフォントサイズを変更する必要はなく、かえって行送りの原則を守る妨げにもなるため可能な限り手動での変更は避ける。

句読点 句点には全角の「.」、読点には全角の「,」をなるべく用いる。ただし英文中や数式中で「.」や「,」を使う場合には、半角文字を使い、直後に半角スペースを1つ入れる。「.」や「,」は、なるべくならば一切使わない。

全角文字と半角文字 全角文字と半角文字の両方にある文字は次のように使い分ける。

1. 括弧は全角の「(」と「)」を用いる。但し、書誌データでは半角の「(」と「)」を用いる。
2. 英数字、空白、記号類は半角文字を用いる。ただし、句読点に関しては、前項で述べたような例外がある。
3. カタカナは全角文字を用いる。
4. 引用符では開きと閉じを区別する。開きには「『 (‘)」を用い、閉じには「』 (’)」を用いる。

2.8 数式

本文中の数式 本文中の数式は $\$$ と $\$$ で囲む。なお $\frac{a}{b}$ (`\frac{a}{b}`) のように背が高い要素は見苦しくかつ行送りを乱すことにもなるので、使用しないようにしていただきたい。

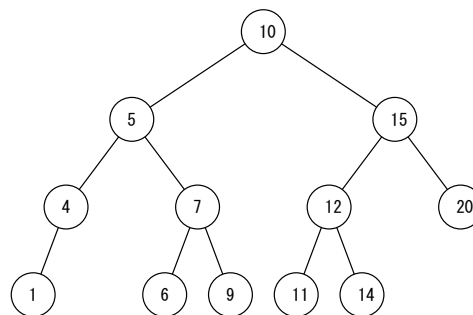


図1 2分探索木

別組の数式 別組数式 (displayed math) については $\$$ ～ $\$$ は使用してはならない。すなわち $\backslash[と\backslash]$ で囲むか、`\displaymath`、`\equation`、`\eqnarray` のいずれかの環境を用いなければならない。これらは

$$\Delta_l = \sum_{i=l+1}^L \delta_{pi} \quad (1)$$

のように、センタリングではなく固定字下げで数式を出力し、かつ背が高い数式による行送りの乱れを吸収する機能がある。

eqnarray 環境 互いに関連する別組の数式が2行以上連続して現れる場合には、単に $\backslash[と\backslash]$ 、あるいは`\begin{equation}`と`\end{equation}`で囲った数式を書き並べるのではなく、`\begin{eqnarray}`と`\end{eqnarray}`を使って、等号（あるいは不等号）の位置で縦揃えを行なった方が読みやすい。

数式のフォント L^AT_EX が標準的にサポートしているもの以外の特殊な数式用フォントは、できるだけ使わないようにしていただきたい。

2.9 図

図は次の形式で指定する。位置の指定に h は使わない。文字数が多い見出しは自動的に改行して最大幅の行を基準にセンタリングするが、見出しが2行になる場合には適宜 $\backslash\backslash$ を挿入して改行したほうが良い結果となることがしばしばある。図の参照には`\figref{ラベル}`を用いると、図1のようになる。

```

\begin{figure}
\centering
\includegraphics[scale=0.5]{search.eps}
\caption{2 分探索木}
\label{fig-search}
\end{figure}

```

図の中では本文と違い、どのような大きさのフォントを使用しても構わない。EPS ファイル自体はカラーも扱うことができるが、印刷時には白黒になってしまうこ

表 1 長野県の市町村別人口²⁾

市町村名	人口総数 (人)	男性 (人)	女性 (人)
長野市	376,072	181,553	194,519
松本市	241,287	118,314	122,973
上田市	155,891	75,963	79,928

とに注意。また、小さな記号や細い線は印刷時に判読不能になってしまうこともある。

2.10 表

表の罫線はなるべく少なくするのが、仕上がりですっきりさせるコツである。罫線をつける場合には、一番上の罫線には二重線を使い、左右の端には縦の罫線をつけない (表 1)。また、表の上に見出しを `\caption` で指定する。表の参照は `\tabref{ラベル}` を用いて行なう。

2.11 箇条書

予稿集では箇条書に関する形式を特に定めておらず、場合に応じて様々な様式が用いられている。

2.12 脚注

脚注は `\footnote` コマンドを使って書くと、ページ単位に*や†のような参照記号とともに脚注が生成される。

2.13 参考文献の参照

本文中で参考文献を参照する場合には、参考文献番号が文中の単語として使われる場合と、そうでない参照とでは、使用する文字の大きさが異なる。前者は `\Cite` により参照し、後者は `\cite` により参照する。たとえば；

文 献 `\Cite{latex}` は `\LaTeX\cite{latex}` の 総合的な解説書である。

と書くと

文献 [1] は `\LaTeX`¹⁾ の総合的な解説書である。

が得られる。

また、一つの `\Cite` あるいは `\cite` コマンドで三つ以上の文献を参照し、かつそれらの参照番号が連続している場合、[1–3] や「文献^{1–3)}」のように、自動的に先頭と末尾の文献番号が -- で結合される。

2.14 参考文献リスト

参考文献リストには、原則として本文中で引用した文献のみを列挙する。順序は参照順あるいは第一著者の苗字のアルファベット順とする。Web ページは数年後に閲覧できる保証はないので、参考文献には URL を可能な限り含めない。このガイドの参考文献リストを注意深く見て、そのスタイルにしたがっていただきたい。

3 拡張機能の使い方

`okumacro.sty` が読み込まれているので、

`\ruby{沈丁花}{じんちょうげ}`

`\kenten{圀点}`

とすると沈^{じん}丁^{ちょう}花^げのようにルビや圀[・]点[・]を振ることができる。`okumacro.sty` の概説については文献 [3] を参照のこと。

参考文献

- [1] Leslie Lamport(著), 大野俊治・藤浦はる美・倉沢良一・小暮博道・Edgar Cooke(訳): 文書処理システム `\LaTeX`, アスキー, 1990.
- [2] 毎月人口異動調査 (平成 28 年 3 月 1 日現在): http://www3.pref.nagano.lg.jp/tokei/1_jinkou/jinkou.htm
- [3] 奥村晴彦・黒木裕介: [改訂第 7 版] `\LaTeX2e` 美文書作成入門, 技術評論社, 2017.

* 脚注の例.

† 二つめの脚注.